

地域独自の多様な経験から普遍を俯瞰する

東北地方を回っていると各地の方言や言い回しの豊かさにいつも驚かされる。東北に来て10年以上たってもその新鮮な印象は変わらない。方言の豊かさは、その地域に根差した自然環境、生活文化、紡いできた歴史の多様性と通底するものだと思う。

月山の周囲の村に住むマタギのおじさんたちの里山に棲む動物たちの話、最上川の川漁師たちの水流や風向きと操船の話、山里のおばさんたちの郷土料理の話などを聞く時、特にそう思う。このような話は方言とその地域独特の言い回しでしか語り得ないものなのだ。そこには標準語では説明不可能な機微があり、確かな暮らしの息づきを感じるのである。

長野県北部の農家出自である筆者は、高校生の頃、故郷でオリンピックが開催されるのを経験した。華やかな舞台の陰では、経済最重視の急速な地域開発というものがあつた。こうした開発には「効率的」「画一的」「競争的」といった姿勢が常に見え隠れするものである。筆者が受けた教育もまたこうした時代に乗り遅れまいとする焦燥感を色濃く反映したものだ。確かに良いこともたくさんあつたかもしれない、しかし今となっては読者の多くがすでに知っているように、それは様々なねじれを生じさせ、数多くの課題を内包した地域社会へ変貌させる元凶でもあつたわけである。

東北に来て地域に根差した社会教育活動に心惹かれた背景にはこんな問題意識があつた。そして筆者は次第に東北の深奥部にある農山漁村に暮らす人々に引き寄せられるように山形県北部のとある山里に住みこむことになった。ここであらためて「地元学ぶ」ことから始めてみようと思ったわけである。それは筆者のような「ヨソモン」と地元住民の目線の違いを生かして何気ない日常の暮らしの中にある地域独自の価値を住民自らが掘り起こす営みでもあつた。そして「何も無い田舎」と言っていた住民の意識が次第に変わっていった。年間を通して山菜やキノコなど豊かな恵みをはぐくむ周囲の里山、ヤマメやイワナが泳ぐ清流、お年寄りたちが作り出すわら細工などの手仕事の見事さ、郷土料理のありがたさ、ムラぐるみで子どもたちを育てていこうとする伝統的な近所づきあいの風景。地元では当たり前だと思っていたことがかけがえのない価値を秘めていることに気がつき始めたのである。

10年間筆者が東北の農山漁村の方々とささやかながら取り組んできて見えてきたことは、住民が、ムラの成り立ちの物語に誇りを持ちながら、地域の独自性を生かして未来を志向していく潜在的能力を持っていることだ。ここでは自らが考え、作り、暮らしに役立てていく主体的姿勢が重要となる。そのような努力はその地域だけのいわば「井の中の蛙」に終わることではない。逆説的だが、ローカルに掘っていけばいくほど、それはグローバルなテーマと接続していくのである。自然環境とかかわる知恵、生活文化の工夫、人と人のつきあいの流儀などコミュニティに根差しながら暮らしに誠実に向き合うことであり、現代社会が必要としているより普遍的な哲学へとつながっていく。それはおそらく故郷をいったんは離れざるを得なかった筆者と同じ背景を持つ多くの読者の生き方にも重なるもの

だろう。そして暮らしを高めるための本当の学びとは地元だけではなく、底に根ざしながらも多様な経験を持った多くの人々とのより開かれた協働の中で生まれてくることに気がつくことになる。ここに筆者は地域づくりの普遍的可能性をみるのである。